

## 國學院大學學術情報リポジトリ

A study of four kinds of "uta-ahase" with brief comments by Motoori Norinaga's own handwriting : a reprint and explanatory notes of "Hayashizaki Syachu uta-ahase" in the possession of Kokugakuin University Library, an erstwhile collection of Takeda Yukichi

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Nakazawa, Nobuhiro メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000158">https://doi.org/10.57529/00000158</a>

〔資料紹介〕

# 新出資料 本居宣長直筆判詞 歌合四種 について

— 國學院大學図書館所蔵

武田祐吉旧蔵書の『林崎社中歌合』の翻刻と解題 —

中澤伸弘

本居宣長の判詞のある「歌合」は既に筑摩版『全集』の別巻二に二十二本、同三に二十二本の計四十四種が翻刻されてゐる。これは主に本居家に伝来したものに加へ、諸方から寄せられた情報によつて蒐集されたもので、別巻三の解題において鈴木淳氏が「今回、発見できなかった『歌合評』が何處かにいまだ眠っていることは大いに考えられることである。」と書いてゐるやうに、まだ未発見のものがあることを示唆されてゐる。

実は國學院大學の図書館が所蔵する武田祐吉元教授旧蔵の寄贈図書（昭和四十年五月）の中に『林崎社中歌合』と称する、歌合が四本合綴されてゐる一冊があり、この四本の歌合の判詞が宣長の、しかも直筆のものであることが判明した。目録にも『林崎社中歌合』とのみあつてその内容については誰もが見過ごしてきたのであつた。今回これを偶然にもお茶の水女子大学の浅田徹教授が閲覽し、未見の宣長の判詞であつて、しかも直

筆ではないかとの疑問を中澤に託された。これによつて私が調査したところ明らかに宣長の直筆であり、『全集』に漏れた貴重なものであることがわかった。

よつてここに翻刻紹介するとともに、宣長の「歌合」の中において本書の占める位置を改めて考へてみたと思ふ。

### 書誌

最初に本書の書誌を挙げておく。

写本一冊。縦二十二・八糎×横十六・一糎。本文五十四丁。表紙、黒（濃緑）地布表紙。見返し、金箔貼付紙。外題、白絹布墨書「本居宣長翁判／林崎社中歌合」中央に貼付。蔵書印「青谿書屋」方印（大島雅太郎）。昭和四十年五月武田祐吉寄贈。目次は次のやうにあり、元来左記のイゝへの個々の歌合が六種あつたことがわかる。

- イ、寛政三年春 三十六番哥合
- ロ、同 四年秋九月 哥合 林崎社中
- ハ、同 年春二月 十六番哥合
- ニ、同 六年正月 廿八番哥合
- ホ、同 哥合

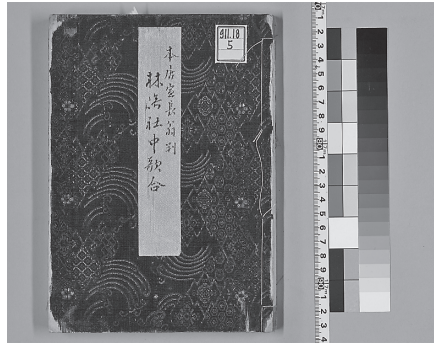
右 判者 舜庵 平宣長

へ、文化十一年宿館哥合 判者 末壽

このうちホ、への二種は現在合綴されてゐず、その存在は不明である。多分本書がこのやうな形に四種が合綴されて、今の形となつたものと思考される。どの歌合も一丁半葉に一ひつが番ひの左右の歌を配し、その左余白に判詞を加へたものである。よつて三十六番歌合は本文十八丁となる。和歌本文と判詞は別筆で、和歌本文の方は歌合ごとに筆跡が異なるが、判詞及び歌の訂正箇所は全て本居宣長直筆の同筆である。ここに翻刻にあたり歌数から適宜「三十六番歌合」「十二番歌合」「十六番歌合」「二十八番歌合」と題した。

### 「三十六番歌合」

一丁オ、表題に「寛政三年辛亥春／三十六番歌合」とあり、表題から一丁ウにかけて作者姓名録のメモ書きのやうなものが書かれてゐる。次いで二丁オに（先掲の目次）があり、六種の書名と判者の名が書かれてゐる。ウは白紙。三丁オからウにかけて（作者姓名録）となり、三十六人の名がその身分、住居地などとともに書かれてゐる。そのあと本文十八丁（合計二十一丁）、一番から十八番までの題は「山霞」、十九番から三十六番までの題は「梅薫風」である。ついで巻末に「飛入狂歌」と題して「山霞」「梅薫風」の題で二首を記す。



表紙

「十二番歌合」

一 丁才、表題に「九月／紅葉深／暁／歌合／林崎社中」とある。その裏に八名の

(作者姓名録)がある。

次いで本文が八丁(合計九丁)、一番から六番までの題が「紅葉深」、七番から十二番までの題が「暁」、ついで追加として守緒、

経先の歌が二丁(四首計八首)あつて、全体で十六番となつてゐる。本書に「林崎社中」とあることから、四種を合綴し新たに名をつける時に『林崎社中歌合』としたのであらう。

「十六番歌合」

一 丁才、表題に「待花二／寄鳥恋／十六番／二月歌合」とある。その裏に九名の(作者 姓名録)がある。次いで本文が八丁(合計九丁)、一番から八番までの題が「待花」、九番から十六番までの題が「暁」である。

「二十八番歌合」

一 丁才、表題は白紙。裏面に十四人の作者姓名録がある。次いで本文が十四丁(合計十五丁)、一番から十四番までの題が「梅薫袖」、十五番から二十八番までの題が「春恋」である。

翻刻凡例

一 國學院大學図書館所蔵 武田祐吉旧蔵書の『林崎社中歌合』(911. 18/5)を底本として、そこに合綴されてゐる、本居宣長直筆判詞のある『寛政三年春／三十六番哥合』(寛政四年) 秋九月／哥合』(寛政四年) 二月／十六番哥合』『寛政六年正月／廿八番哥合』の四本を翻刻した。

- 一 漢字は表記のままに従つた。
- 一 適宜濁点を加へた。
- 一 変体仮名及び片仮名は通用の平仮名表記に、また繰り返し記号も平仮名に改めたが、平仮名の踊り字(ゝ)はそのままとした。
- 一 宣長による歌への直接の加筆訂正の箇所は括弧書きにした。
- 一 虫損、書き落しなどによる不明箇所は括弧書きでその旨

を註記した。

一 見せ消ちの箇所は傍線を加へ、傍らに訂正をそのまま加へた。

一 宣長の判詞の改行は本文のままにした。

一 歌はどれもが一行書きであり、一つの歌の番号と判詞とをもつて一丁表(裏)となる。

一 歌の作者名は宣長の判詞の書き入れ後に、歌の右に記入されたものであるが、『廿八番哥合』については、歌の下に書いてあるが、翻刻にあたり、他の歌合同様に歌の右に揃へた。

一 目次にある『同哥合』と『文化十一年宿館哥合』とは共に本書には綴ぢられてゐない。

一 (表題)(目次)(作者姓名録)などの見出しは翻刻者が補つたものである。

一 一丁オからウにかけての作者姓名録はそのあとにある作者姓名録と重なるので翻刻においては割愛した。

寛政三年辛亥春  
三十六番歌合

(目次)

寛政三年春 三十六番哥合

同 四年秋九月 哥合 林崎社中

同 年春二月 十六番哥合

同 六年正月 廿八番哥合

同 哥合

右 判者 舜庵 平宣長

文化十一年宿館哥合 判者 末壽

(作者姓名録)

寛政三年辛亥春  
作者 判者 本居宣長

從三位 定綱 作者定長

藺田 氏韶 益谷大學 末壽

九禰宜 守訓 七禰宜 守諸

菊谷兵部末偶 益谷吉之允末晴

白子人 茂木 白子人 並木

イ、三 十六 番 歌 合

(表題)

白子人 直木

一身田 祐秀

津七里 政要 勘十郎

醫師 直章 津人

政式 津人

津 七里奥方玖能

名古屋 大館内室 民

小浦彦之允朝通 紀州家臣

三井 高蔭

本居 健亭 春庭

松坂 直道

林伊右衛門利長 松坂

松坂 朝行

白子 昌平

一身田 宗凭

倉田山城守有成 津人

倉田金十郎英林

房氏

同侍女 世繼

同侍女 美岐

松坂 直丸

松坂 常岳

松坂 手纏

松坂 式通 朝通同人

三谷景介 清通 松坂醫師

本居藤垣内翁 大平

神杉の木の間がくれにさほ姫がかすみの袖をふるの山もと

左 四の句やもじすこしいかゝ かすみもいくへなど有つべし

右 木間がくれにといふは聞なれず 三の句のがもいかゝ 霞の袖をふるとはいかなるをいへるにか心得ず

氏韶

二番

左

春されば雪と花とやみよしの、山の霞はたちかくすらむ

右

春もまだ浅間の山のいつしかと煙にまがひたつかすみかな

左 たしかならず 雪を花と見よとといふことか さは聞えず

右 二三の句のいひかけの意おぼつかなし

四の句でもじなくてよろしからず 此哥ハ二の句のものもじも

よろしからず 此哥は春はまだ——の山もけぶりまがひて

——と有べし けぶりにまがひてといひては霞のかた

よわし けぶりまがひてといへば煙が霞にてまがふ也

(本文翻刻)  
山 霞

一番

左 勝

さきぬべき花のおもかけ立そひてかすむやいづくみよしの、山

右

定長

貞陰

三番

左 勝

ふる雪の(も) しら髪と見し山眉も(の) けさはかすみて若がへりけり

守訓

右

守詣

くれなゐに雲のはたても色こくて朝日にかすむ遠の山端

左 眉を髪と見んことはいかゞ いひさまわろし 初句をふる雪もとすべし もといへば髪と眉とは別なる也

右 上句すべていかゞ 又これは朝よりは夕の方に近ければ夕日などいはん方まさるべし

四番

左 持

末偶

五百重山うちこえつゝも来し春は霞にさへもまよはざりけり

右

末晴

三輪の山霞の袖もかゝるかなしるしの杉のむかししのべど

左 上句いかゞ 又五百重山を越えきたればとて霞にまよふまじきはいれいかゞ 霞にもまよはず五百重山をこしきめとこそいふべけれ

右 聞えがたし

五番

左 持

茂木 白子

天のはら雪げの雲も春風にたえたえかすむふじのしば山

右

並木 白子

浅みどり木の芽はる風のどかにていづれかすまぬ山端もなし

左 春風といへばのどかなるさまなるに雪げの雲はいかゞ 初二句時しらぬ高根の雪もなど有べくや 但しよみぬしの心は雪げの雲も春風にたえたえになりてといふことならんか その意ならば雪げの雲もたえたえにといひては聞えず たえたえかすむとは霞のたえたえほのかに立る

さま也

右 下句いひざまたがへり いづれといはゞいづれの山端もかすむといふべくかすまぬ山野もなしといはゞいづれといふにかなはず

六番

左

直木 白子

ふるとしはしらぬ霞に跡見えて春のこえけむ相坂の山

右

昌平 白子

起いで、まづうちむかふ山端に春たちそむる朝がすみかな

左 いひざまたかならず よみぬしの心は霞の立たるによりて春のこえたりいふ跡の見ゆといふ意なるべけれど 霞に跡の見ゆるといふことはいかゞなるうへに ふるとしはしらぬといふ

こともをさなきいひさま也

右 させることなく少しをさなければ聞えたり

左 持 直章 同

七番

左 持 祐秀 一身田

右 佐保姫の霞の衣いろはえてけふたちそむる四面の山端  
右 峯にたつ煙まがはぬうすがすみ春も浅間の山とこそ見れ  
英林 同

明わたる空もどかに足引の山端とほくたつ霞かな

左 三の句あまりて無用の詞也 三四の句をたちそめて春こそきぬれなどあらまほし

春くれば松ふく風も音たえてながむる山のかすむのどけさ

右 下句いひざまわろし 春もまだ浅間の山は峯にたつ

左 下に明わたるのあへしらの詞あらまほし

——うすがすみかなとこそ有べけれ

右 ながむるいかゞ 無用の詞也

十番

左 政式 同

八番

左 勝 政要 津

よし野山にははぬさきも花の色の面影にたつ春霞かな

うちなびき春来にけらしほのほのと明る外山のかすむのどけさ

右 勝 房氏 同

右 有成 同

雪に見し面影かへて鏡山くもるや春のかすみなるらむ

天の戸を明ゆく空の朝霞立田の山は遠ざかりぬる

左 二の句わろし 三の句色のも無用の詞也 上句まださかぬ

左 けらしと結のことかけ合わろし 霞たな引などちむむべき也

花の梢もよしの山と有べし

右 下句いかゞ 立田は西の方にあればことよろしからず 四の句

右 よろし

はもじもいかゞ 立田山に限りて遠ざかるやう也

十一番

左 持 玖能 同

九番



浅みどりはやそめかけて佐保姫の霞の袖もにほふ山端

右 世繼 同

煙たつ浅間がたけはいとゞなほ見えわかぬまで霞たな引

左 初二句柳の哥とも聞えたり 霞の袖もにほふとは何に

にほふにか 霞の外ににほはず 物あるやう也いかゞ

右 いとゞなほといふは近世のよろしからぬ詞也 四の句も

いかゞ をさなし 猶いひぎま有べし

十二番

左 民 なごや

佐保姫の霞のころも春ふかくすそ野をかけてこむる山端

右 勝 美起 同

きのふまでまぢかく見えし山端もたえだえにこそかすみそめけ

左 こむるいうならず 又すそ野をかけてといひて山端と留り

たるもいかゞ

右 結句をさなければ聞えたり

十三番

左 勝 朝通 以下松坂

いつしかと春こそ来ぬれ雪きえて霞にうづむ四面の山端

右 直丸

いつのまにをちこちこめて山端の見えぬばかりにかすむ春かな

左 二の句春——来ぬればと有べし

右 いつのまにといひて かなと留りたる てにをは不調

いつしかといつるまにとは下のてにをはのあしらひかはること

なり 此哥はいつしかと、はいひてかなへり 二の句無用

十四番

左 高蔭

大原やをしほの山のみねの松千とせをこめてかすむ春かな

右 勝 常岳

時しらぬ高ねも春はたちこめてかすみにきゆる富士のしら雪

左 四の句までたゞ祝の哥のやうにて霞にはかに立たり

右 たちこめて 少し口をし 二三句高根の色も春くればなど有べし

十五番

左 勝 春庭

いつとなくふる白雪も立こめて霞時しるふじのしば山

右 手纏

春日山いづる日かけもほのぼのと霞をそへてにほふ空かな

左 聞えたり

右 霞をそへていかゞ 霞をそひてとこそいふべけれ

十八番

左 持 天のはら煙も雪もたちこめて春にかすめる山はふじのね

十六番

左 勝 直道

あらたまる春のそらとてふじのねの雪さへ見えすたつ霞かな

右 式通

春くれば花よりさきの面影にかすみそめたるみよしの、山

左 大體聞えたり

右 花よりさきの面影をば何の面影ぞ 二三花のおもかけさき

だちてなどこそ有べけれ

梅 薫 風

十九番

左 定長

咲いでし木末やいづこ梅が香を袖に吹いる、園の春風

左 持 利長

見わたせばよもの山端ほのぼのと煙にまがふ春かすみかな

右 清通

あなたにも春ぞ来ぬらむ足引の山辺のどかにかすみなりけり

左 煙より所なし

右 あなたの事用なし なりけりと留りたるもかなはず

右 勝 末壽

たづね見ぬこと里人もしのべとや梅が香さそふ四面の春風

左 上下かけ合わろし 初句のいでしもういらぬ詞 いづこと

疑ひたる 詮もなし

右 さそふ 猶有べし

廿番

左 勝

氏韶

打はへて霞の網をはる風のもれてや梅の香に、ほふらむ

右

貞陰

梅花めぐれる物をはる風のいつの人まに香をぬすむらむ

左 趣意はめづらかなれど網をはる風など梅の哥にはいう

ならず されどよくよみと、のへられたり

右 ぬすむも又いうならず これこの詞は哥からによるべし 又めかれず

見てみたらんには香をよそへぬ すみゆくことをばいかに

してかしらん 香をぬすむことはよそのぬすみゆきたる歌の人ならで

はしるまじきこと也

廿一番

左 持

守訓

香をはこぶほどもあらしにさそはれてつひに花さへちらんとす

らん

右

末晴

春風のやどりをとへば梅の花咲でてにほへる庭のこのもと

左 はこぶいうならず 程もあらしいか、 つひにもいか、

右 梅の木本を春風のやどりとはいひがたし とへばもいか、

私がやどりは梅の木本でござると答へたるにや 庭の  
もいらぬ詞也

廿二番

左 持

末偶

梅がかを袖にうつして朝戸出のさむさわする、庭の春風

右

守諸

咲みだる庭の梅が、春風にはほひみちくる釣簾のあけぼの

左 四の句火をたきてあたりたるやう也

右 みだる みちくる みないか、 みすの曙もいか、

廿三番

左 持

茂木

たがやどの梅の梢をさそふらむ花なき里もにほふ春風

右

昌平

たが里にさきけむ梅をさそひきて花のかあかぬ軒の春風

左 三の句さそひきぬらんとはいはでは意たらず 其うへ梢を

さそふもいか、

右 二の句けむもいか、 四の句あかぬ上とかけ合なし

廿四番

左 直木

ふる雪の柴の戸ほそもかをりを来て梅より春の風はたつらん

右 勝 並木

梅の花さきそめしより吹風にあらぬ梢もかつにほひけり

左 聞えがたし

右 三四の句聞えたれ共吹風にはあらぬといふやうにふと

き、なされて少し心ゆかず

廿五番

左 祐秀

梅がえはそれともわかぬ朧夜に吹風にほふ窓の春風

右 勝 有成

夕くれば色こそ見えねさそひくるにほひにしるし梅の下風

左 風二ツあるはいかゞ

右 色の見えぬは夕ぐれならず其夜ならばいよいよなるべし さそひくる

にほひにしるし梅花色こそ見えねよはの春風とあらばよけん

廿六番

左 持 政要

色よりもあはれぞ深きたが里の梅が、おくる風としらねど

右 宗凭

春の来ていづくの里も此ころは風ものどけくにほふ梅が枝

左 色よりもといへる 下にかけてあはず

右 下句いひざまわろし 初句梅咲て 下句花のか深く

匂ふ春風と有べし

廿七番

左 持 直章

梅香の空にみちてや此ころは花なき里もにほふ春風

右 房氏

ねやの戸のすき間の風もにほふなり軒端の梅の花の盛は

左 梅が、や空にみつらんと有べし

右 ねやといはゞ 夜にてあらまほし

廿八番

左 政式

春風は梅の木の間を過ぬらむにほひになびく青柳の糸

右 勝 英林

はてはうき物としらでや梅の花にほひを風にまかせそむらん

左 このまいかゞ 糸無用 青柳のなびくもにほふ春

風は梅のたち枝や過てきぬらんなどあらまほし

右 上句さくらの風情にちかし 結句そめけむなるべし

廿九番

左 持 玖野

咲しより色ぞゆかしき梅の花袖にかをりてかよふ春風

右 美木

うめの花猶このもとに立よらむにほひ吹くる風のしるべに

左 初句無用のこと也 二の句もいかゞ

右 二三句いかゞ

三十番

左 民

咲そめし梢やいづこ春風の吹くるごとくにほふうめが、

右 勝 世繼

わがやどのみぎりの梅の咲しより手折ぬ袖もにほふ春風

左 咲そめしと吹つるごとにとかけあはず いづこも用なし

右 みぎりいかゞ

三十一番

左 勝 朝通

津の国の難波わたりに咲梅のにほひはよもにみつの浦風

右 常岳

梅さけばのどかなる日にもほふ香に吹とはしるき春の夕風

左 上句いひざまわろし 二三の句難波の梅の花さかりを

いふべし わたりにといふこと 此哥にはよろしからず さ

かりといふにて匂ひのみつるによくかけ合べし 哥は かやう

の所に心をつくべきわざ也 下句はよろし

右 二三の句のどけき庭の春風も 結句——き花の匂ひに

などいふべし

三十二番

左 持 高蔭

よ、経てもあかれぬ花のにほひかな春やむかしの梅の下風

右 直丸

かばかりに吹くる風のにほへるは梅津の里のさかりなるらん

左 あかぬをあかれぬといふことなし

右 初句にもじわろし かくばかり成べし 三の句にほふはといふべき所也

すべて今のよの人 にほふとにほへるとを同じ意に

つかふはひがごと也 すべて此格の詞みな同じ

三十三番

左 持

春庭

吹すぎて又たが袖にかよふらむうはの空なる風のうめが香

右

式通

咲つゞく梅津の里の八重霞しるべへだてずにはふ春風

左 おかし 二三と四とよくかけ合たり

右 つゞく少しいかゞ 結句の句ふもなき方まされり 初句

咲句ふ 結ぬ(す) 春風ぞふくと有べし

三十四番

左

直道

春風の吹くるまゝによそながら立けるばかりにはふ梅が、

右 勝

手纏

梅の花さけるさかざる里わかでいづこもにはふはるかぜぞふく

左 三四句いかゞ 古哥の立よるばかり有しよるとはいたく趣

ことなるを

右 下句うちひらめなれど聞えたり

三十五番

左

利長

いろ見えぬ山がくれの梅が、は吹くる風に人やしるらん

右 勝

大平

立よればをらぬ袂もさく梅のかごとがましくにはふ春風

左 初句の色いかゞ 此哥桜の風情にちかし 三の句香

はといへるもいかゞ

右 おかし

三十六番

左

有行

立よれば春やむかしの涙さへこぼれて袖にはふ春(夕)風

右 勝

清通

たがやどの木のもと過し風ならむ軒端のどかににはふ梅香

し されど落題なれば

左 新古今の風情 涙さへこぼれて袖に句ふいとおもしろけれど今少し

いかはせん

いひざま有べし 春も二つ有 涙さへこぼれて句ふ

梅花春やむかしの袖の夕風とも有べし

右 上下かけ合 なきがごとし たゞ吹風に軒端のどかに句ふ

梅が、としても同じことなれば也 上句大かたは吹としもなき春風などあらば下によくかなふべし

(卷末記入)

飛入狂歌

山霞

目がねさへ鼻の高根にかゝる也此目も春はかすむ老人

梅薫風

えならずよ軒の梅が、こき交せて匂ふかは屋のまどの春風

口、十二番歌合 (中澤註 追加四番あり)

(表題)

九月

紅葉深

暁

歌合

林崎社中

(作者姓名録)

左

泉藏人 舍輝

澤瀉伊織 常尚

桐少進 邦壽

中川和泉 経先

判者 本居宣長

右

井面 守訓

益谷 末壽

菊谷 末偶

蘭田 守諸

(本文翻刻)

紅葉深

一番

左

色かへぬ松さへ秋は紅葉にくわ(は)、る山の唐錦かな

舍輝

右 勝

守訓

立田山かけゆく袖も紅の色ぞてり添秋のみみぢ葉

左 題の深の意なし くはゝるいかゞ 錦も縁なし

右 二の句かけは下と有べし

二番

左 常尚

露時雨いくしほそめて秋ふかき色にぞ出る木々の紅葉は

右 勝 末壽

明日よりは何を染まし村時雨紅葉は色のかぎり成ける

左 いくといひてぞといへる てにをは不調

右 結び けりと有べし

三番

左 持 邦壽

峯麓染も残さず紅のにしき色こき山の紅葉は

右 末偶

もみぢ葉の色さへふかき立田河から紅に波ぞさわげる

左 錦縁なし

右 落葉也

四番

左 持 常尚

明日までの時雨もしらず行秋に木々の紅葉の色増りける

右 末偶

時雨でもつれなき松をこゝろさへふかめてかゝる蔦紅葉哉

左 初三句心得かなし行秋もいかゞ 結びも色ぞまされるといはてはてにをはい

かゞ

右 三四句いかゞ

五番

左 勝 邦壽

夕日さす遠の高根の紅葉は(は)よそめも色のかぎりとぞ見る

右 守訓

そめそめし梢もわきて此夕入日いざよふみねの紅葉は

左 聞ゆ

右 わきて不叶 四の句いかゞ

六番

左 持 舎輝

妻どひの色もそふかと思ゆる哉鹿鳴山の深き紅葉は

右 末壽

おそくとき梢もわかず染尽す色は千入の木々の紅葉

左 妻恋の色いかゞ

右 おそくとき梢 かななることにか



暁

七番

左

邦壽

鳥の音もきこえぬ里の暁はかたぶく月を哀とぞ見る

右 勝

末壽

つくづくと身のうきことをおもひ出てね覚わびしき暁の床

左 鳥のね 聞ゆる 里はかたぶく月あはれならざる物にや

右 出ては つゝなるべし

八番

左 持

舎輝

山かづら暁かけて響きくる尾上の鐘の知らず閑けき

右

末偶

今こんの空たのめさへつきはて、き、うかりける暁の鐘

左 三の句いかゞ

右 上の句いかゞ

九番

左 持

常尚

ながき夜もあかつきかたになりぬとやゆふつけ鳥の知らず数そふ

右

守訓

今はとて立いでねども旅枕聞てうれしきあかつきの鳥

左 やといひてそといへる不調

右 初二句心得がたし

十番

左

常尚

つくづくとね覚め侘しき暁の鐘より後も夜半ぞ久しき

右 勝

末壽

里遠み鳥の音聞かぬ山住もね覚にしるきあかつきの空

左 暁のかねより後をよはといへることいかゞ

右 しるき 少しいかゞ

十一番

左 持

舎輝

誰か今うしとおもはん鳥の音の我に嬉しき寢覚をぞする

右

末偶

暁とつげの小枕打かへしむかしをしのぶうきね覚めかな

左 初二句いかゞ 四の句我にいかゞ すべての趣意もいかゞ也

右 枕をうちかへし といふこといかゞ

十二番

左 持 邦壽

衣々の別もさそふ暁のうきを知らざる鳥の声々

右 守訓

まじろまで物思ふ夜の嬉しきは暁つぐる庭鳥の声

左 一首の趣意 立がたし

右 二の句 夜のとはいかゞ 夜にとこそ有べけれ 庭鳥いかゞ 鳥のこゑ

かなと有つべし

追加

紅葉深

左 持 守諸

ちり残るは、その枝の一むらに時雨で染し色はまされる

右 経先

あだに置露の思ひの色に出て夕べや深き木々の紅葉は

左 上句いかゞ

右 上句いかゞ 四の句もいかゞ

左 勝 経先

露霜の沖津白波立田山秋をふかめて染る紅葉は

右 守諸

日にそへて色まさり行紅葉はやしほの岡の程ぞ見へけり (えける)

左 ふかめていかゞ

右 下句いかゞ 結句のてにをはいかゞ

暁

左 勝 守諸

鐘の音につげの枕をそばだて、聞もくるしき寝覚成けり

右 経先

ね覚めして何ものうくや思ひけん暁かけて鳥の啼らん

左 結句 うちひらめ也

右 二三句てにをはいも不調 聞えがたし

左 持 (名欠ク)

鳥の音にうきねの床の夢覚てまた物おもふあかつきの空

右 (名欠ク)

聞もうし別れしまゝの閨の戸に夢の名残の暁のかね

左 うきねの床いかゞ

右 恋の哥也

八、十六番歌合

(表題)

待花二

寄鳥恋

十六番

二月歌合

(作者姓名録)

左

坂常陸

尚品

岩井田

尚友

判者

本居宣長

待花

一番

左 持

舍輝

山桜一木を庭に移しうゑて花待宿となれる春かな

右

末はる

さくをりは咲べき花とひたすらに思ひかへせと忘れやはする

左 下句いかゞ

右 初二句いかゞ ひとすらはいかゞ 結句わすられぬかなといふべきいほひ

也 すべて題にうとし

二番

左 持

尚品

つらきまで花を待乳の山桜俯みゆる峯の白雲

右

常尚

さきぬやと分る山路は風さえて花に見まがふ雲だにもなし

左 初句いかゞ

右 下句いかゞ

四の句も力なし

三番

左 持

邦壽

春きてもまだ咲やらぬ花ゆゑに心尽しの日数をぞふる

右

經先

待としも思はゞ春はまだきともとく咲出よ花のしたひも

四の句はまつとはいはではかなはず をまたる、とはいひがたし

左 初句いかゞ 桜は春来てやがて咲物にはあらず

右 初句しもいかゞ 三の句聞えず 下紐よしなし

四番

六番

左 持

尚友

見てくらす春の日数のすくなきを思へばいとゞ花ぞまたる、

右

経先

ちる花の名残のうきにくらぶれば咲ぬを待もなほまさりけり

む

左 初句いかゞ

右

末偶

初花の匂ふ木すゑは高砂のまつにかひある山ざくらかな

左 結句ぞもじ すこししてよはし けれど聞えたり

七番

右 題にかなはず

左 持

末壽

山里は春こそ殊にわびしけれ花も人めもいとゞまたれて

右

(名欠ク)

咲ぬればもろくも花のちる物をいかにまたる、山桜ぞも

左 いとゞといふこと人めにはさもあるべし 花にはかなはず

花をまつは春のみことなれば也

待わびる心もしらでつれなくもまだとけやらぬ花の下ひも

右

常尚

峯の雪それとばかりの面影にいとゞ待る、はなのさかりを

左 わぶるをわびるといふは俗言也

右 二の句いかゞ 終りのをもじ四の句にかなはず をといへば

八番

右 二の句ももじわろし 山桜ぞもと留りたるいかゞ

左

(名欠ク)

まぢりふるおなじ心に御蘭生の花や咲しと人のとひくる

右 持

末偶

この頃は光のどけき日にそへてしづ心なく花ぞまたる、

左 初二句いかゞ 御園生よしなし

右 二三のつゝいいかゞ 上句にそへて光のどけき 此ころはとこそ有へけれ

寄鳥恋

九番

左

舎輝

よをかさね待にむなく更行(ゆけ)ば恨数そふ鳴の羽がき

右 勝

常尚

恋くて稀に逢夜の暁をわりなく急ぐ鳥の音はうし

左 鳴の羽がき 俄にて四の句迄に趣意なし

右 結句 ねぞうきといふべきを はうしといふは近き世の

わろきくせ也

十番

左

(名欠ク)

逢と見し夢もあだなる春のよは物うくひすの涙をぞ添ふ

右 勝

経光

真葛原わが身鶉の床も(は)あれて恨がちなる秋風ぞふく

左 夜に驚いかゞ 結句のてにをはも をぞといへばそふると

いははかなはず

右 三の句 ももじいとわろし はと有べし

十一番

左 勝

邦壽

言の葉はまだつれ(き)なくに暁の別れを急ぐ鳥の音ぞうき

右

末偶

君が家にほととくゆきて時鳥我かく待とらみつげてぞ

左 言の葉いかゞ

右 ほととくといふこと聞えず 結句もいかゞ

十二番

左

尚友

思ひわびねられぬ夜半のうき事をそへて数かく鳴の羽かき

右 勝

常尚

山鳥のをちの鏡のそれならば餘所(よそ)にも人の影をだに見む

左 そへて数かく いかゞ

右 それならばいかゞ

十三番

左 持

末晴

とゞめても袖に涙は山鳥の長き思ひを哀とは見よ

右

経先

たのみにし人の心はあら鷹の逢みん事の程もしられて

左 とゞめてもやまぬとはいかゞ とゞめてもとまらぬとこそいふべけれ  
思ひはおの仮字なれば尾のいひかけいかゞ 又長き思ひも縁なし

右 初句にしわろし 頼むとこそいふべけれ あら鷹縁なし

初句にしわろし 頼むとこそいふべけれ あら鷹縁なし

十四番

左 持

尚友

穴鳴き(なき)と人にはいひて慰めと心はすまぬ鳥の声かな

右

(名欠ク)

偽としれどもまたむ秋のよの長鳴鳥の聲を限りに

左 聞えがたし 心はすまぬも俗言也

右 偽としりながらまたんとはいかゞ

十五番

左 末偶

うらうらと霞がくれに行雁のほのみし妹に恋わたるかも

右

末晴

妹をこふ心は空にとぶ鳥のつばさもあらば行かよはまし

左 うらうらといかゞ

右 心はいふことかなはず 初二句妹こふる我身はなど有べし

十六番

左

邦壽

五月まつ心は同じほとゝぎす我のみ恋てしのびねになく

右

勝

末壽

山鳥の初尾の鏡はつかにも恋しき人の影も見てしか

左 何故に五月をまつにか

右 結句 影をなるべし

二、二十八番 歌合

(表題) なし 白紙

(作者姓名録)

左

右

末壽  
守諸  
末偶  
邦壽  
常尚  
定長  
守屋昌綱

末晴  
舍輝  
尚品  
守訓  
經先  
尚友  
古人  
判者  
本居宣長

(本文翻刻)  
梅 薰 袖

一番

左 持

かたしきの誰なごりをとうき名のみかひなくた、む袖の梅が香

右

末晴

うつしとる匂ひならねど休らへば袖をやどりの梅の下風

左 三四句うき名やた、むと一句にてよき所也

右 四の句いかゞ

二番

左

おしてるや難波にさけるこの花に立よる袖もかをる春風

右 勝

舍輝

思はずも袖の香ふかくなりけり梅の木陰に春日くらし

左 上下かけ合なし

右 結句桜のさま也 梅には少し似つかはしからず

三番

左 勝

柴人の袖さへ花の香に匂ふ山路の梅やさかりなるらむ

右

尚品

中垣もこえて色香やおくるらむうめ咲頃の袖の夕風

左 三の句のびらかならず 二三句かへる袂も匂ふ也と有べし

右 上下かけ合わるし

四番

左 勝

梢にはいとふ物からさそひくる袖にうれしき梅の春風

右

守訓

邦壽

ゆふやみに色は見えねど梅花ありとや袖にかをる春風

左 初二句桜にちかし

右 有とやといふことかなはず 古哥をよく考へたまへ

七番

右 此いなやは俗言になる也 とへばも何事を思ひたるにか

左 持

昌綱

きえ残る春のそのふのゆきとしも見るにまがはぬ袖の梅が、

右

古人 文房奉納

吹かへす霞の袖もかをる覧なべて花ちる梅の追風

左 見るにまがはず いかゞ

右 吹かへす なべていかゞ 又ちらす共匂ひは有つべし

八番

左

末壽

天津空(風)をとめの袖も匂ふらし(ん)雲ぬに□(虫損)つ

る梅の春風(よもの梅香)

右 勝

舍輝

木ずゑより移る日影も花の香も袖にのどけき梅の下陰

左 空と雲るとは病也

右 聞えたり こずゑはこのまの方下陰にはよろしからん

九番

六番

左 勝

定長

かをり来て袖にうつりしうれしさをつゝむに餘る梅の追風

右

尚友

立よりにて問へばいなやもわかぬまに袖にこたふる風の梅が香

左 うつりしはうつれるならではわろし 此けぢめをよく

思ふべきこと也 今の人は多く此わきまへをしらず

三の句をはもなるべし



左 持

守諸

さきしより匂ひばかりを我袖にせきとめえたる梅の追風

右

尚品

をりかざす袖にしめつる梅が香に霞のひまもいとふ春風

左 四の匂いとわろし

右 上下かけあはず 下句聞えがたし

十番

左

末偶

香をとめて立よる宿の梅の花をらぬ袖し(を)も人やとがめむ

右 勝

守訓

ひとえだはたをりやせまし行摺の袖さへかをる梅のしたみち

左 香をとめてはこれは香をしるべに尋きたる意なれば袖に

香をとめたるとは別也 故に袖に香のとまりたる意いひ

しらず

右 聞えたり

十一番

左 持

古人

一えだの花に心のうつるより我袖しもぞ梅のかをれる

右

守先

一木だに袖にかをればもろこしの梅咲嶺の風ぞゆかしき

左 初句わろし 我いらぬ詞也 結句のもじわろし

右 題の薫袖の意はたらかず 二の句深く匂へばとしても同じこと也

十二番

左

勝

常尚

うめの花盛になれば木の本に立よる袖も匂ふはる風

右

尚友

梅さける垣ねはそことしらねどもさだかに匂ふ袖の春風(春の夕風)

左 聞えたり

右 薫袖の意はたらかず

十三番

左

定長

巻あぐる釣簾の外風の春風も袖にあやしく匂ふ梅が、

右

勝

邦壽

たが里の垣ねの梅をさそふらむ袖にあやしく匂ふ春風

左 初二句近世めきたるうへに下にさらにかけ合なし

あやしきもいかゞ

右 あやしきいかゞ

十四番

左

昌綱

咲かたの垣ねもそこと吹風に梅のにはひの袖にみちぬる

右 勝

末晴

さかりなる木末をさそふ春風にたをらぬ袖も梅が香ぞする

左 初二句下にかけて合なし みちぬるもよせなし

右 二の句いかゞ こずゑよりふくなど有べし

春 恋

十五番

左 勝

末壽

おもかげはおぼろげならずしのばれぬ春やむかしの月のよなよ  
な

右

尚品

二見がたかひてふあらば春のよの夢ばかりなる手枕もがな

左 上下かけ合よし 三の句は猶有べし

右 聞えがたし 二見がた何寺の開帳にか手枕を靈宝に

せんとてもとめたるにや

十六番

左 持

守諸

鶯の鳴音さびしき夕ぐれは君をかけたつ、物おもふかな

右

守訓

涙さへ袖にをやまずつれづれと春のながめに物おもふ頃

左 後世の風にていはゞいふべき事あれどこれはむかしの風と見て

あるべし それにとりては結句物ぞかなしきと有べし

右 聞えたり

十七番

左 持

末偶

春もまた君が心のさえさえてなみだのつら、とけずも有かな  
右 (虫損) 守晴カ

いつはりをたゞすの森のみしめ縄長き春日にかけてちかはむ

左 初句またはなほなるべし 三の句いかゞ

右 偽をたゞすといふこと下にかけて合わろし 春日も詮なし

十八番

左

邦壽

うき中の末野におふる若草のもゆるかひなき我思ひかな

右 勝 尚友

きくにさへうしや焼野に鳴きゝす我もこがる、おもひたへねば

左 うき中の末いかゞ 末無用也 生るともゆると重なれり

上に草のもゆるかひなきをといはでは四の句はたらかず

右 初句にさへいかゞ かくもうしやといひてことたれり

十九番

左 勝 常尚

つれもなき人の心の春霞隔てはてぬる契かなしも

右 (名 虫損)

朝かげに我身はなりぬ若草のもえ出るなす恋のしげけき

左 春霞といふことをのぞきても同じこと 又何にかへても同じこと

なれば題意はたらかず

右 上下むげにかけ合なし 其うへ上と下と詞のつが

ひもと、のはず

二十番

左 定長

したもえはまたうら若き恋草もむすばぬ(貼紙 結はん也) 露の契をぞまつ

右 勝 末晴

妻をこふ(こふる) 野邊のきゝすもよそならで(す) 同じ思ひに音をのみぞなく

左 下句聞えがたし

右 きゝすを を鹿にかへても同じこと也 されば必きゝすによ

れる詞を添ざれば其物うとく也

二十一番

左 昌綱

はる風の吹につけても青柳のいとゞこゝろのみだれ初つる

右 勝 (名 虫損)

雪ふかき野邊の若草したにのみもゆる思ひをしる人のなき

左 初いかゞ 又春風の吹につけて心のみだる、其よしなくてはいかゞ

右 初句冬めきたり 雪きえぬなるべし

二十二番

左 勝 末壽

はれやらで物をこそ思へ我妹子を忍ぶ軒端の春雨のそら

右 守訓

我恋は霞のおくの山桜いろに出とも人にしれめや

左 聞ゆ

右 四の句様のうたにはさも有べけれど恋の意の方にはいかゞ 色に出とも人はしらむとはいかゞなれば也

二十三番

左 持 守 諸

うち霞む春のよすがらてる月のおぼろげにのみ物思ふもうし

右 (名 虫損)

つゝめどもあだの大野の春霞うき名と共にたつがくるしき

左 かすむといひて照月はいかゞ 下句聞えがたし

右 あだの大野いかゞ あたといふこと此哥にはわろし 四の句いかゞ

霞と共にうき名のたつとこそいふべけれ うき名と共に霞

のたつといひては霞のたつがくるしきやう也

二十四番

左 末 偶

逢ことはかたみの衣はるのよの夢なりけりとかつ思ひつゝ、

右 勝 尚 友

隔てなき心としら (なりせ) ば春かすみ空 (千重に) にたつとも名をや (は) をしまむ

左 聞えがたし

右 直しのごとくあらまほし

二十五番

左 常 尚

もえ出る心の色も若草のなびかぬすゑを待ぞはかなき

右 勝 末 晴

分てなほ春の詠 (ながめ) のつれづれに思ひまさりて袖ぬらしつゝ、

左 聞えがたし

右 初句いとゞしく 結句袖ぞぬれそふとあらまほし

二十六番

左 定 長

春のよのおぼろげならで見し人の俤霞む月のしたふし

右 勝 舍 輝

こひこひし涙のつら、打とけて逢ようれしき春の手枕

左 おぼろげならじ (で) 見しとはいかなるをいふにか 月の下ふし心得ず

右 聞 ゆ

二十七番

左 持 昌 綱

雪きえぬ春の澤邊の草ならでもゆるる思ひを人のしるかな

右

尚品

袖にせく思ひは深き涙河逢瀬のほどは霞へだて、

左 聞えがたし

右 結句 俄に霞立出て上にあらふによせなし

二十八番

左 持

古人

あふことはたゞ春のよの夢ばかりうつゝ、にこふぞたとへだになき

右

邦壽

人は今よ（そに 虫損 但し判詞から補ふ）のみしておぼろよ

の空行月の影だにもみず

左 下句いたくわろし

右 よそにのみしてとは雨夜などの月こそいふべけれ 初句の今もいか

解題

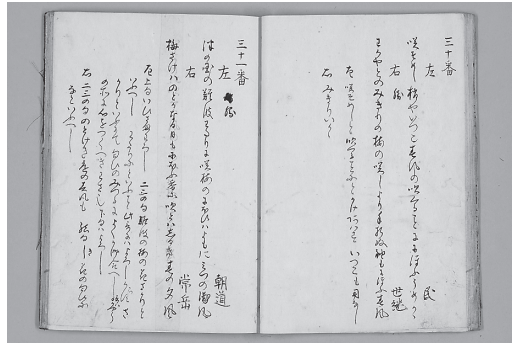
『林崎社中歌合』には時代の順に関係なく、四種の歌合が綴られてゐるが、本解題は便宜上年代順に一「寛政三年春三十六番歌合」、二「寛政四年春二月歌合」、三「寛政四年秋九月歌合」、四「寛政六年正月歌合」の順とし、別掲の各表における

符号もこれと同じにした。翻刻は綴じられてゐる順であるので、参照する場合には注意を要する。

一、「三十六番歌合」

四種の歌合のうち年代の最初のものがこの歌合で、寛政三年春に行なはれてゐる。出詠者は姓名録の順に姓を補ふと、佐八定綱（定長） 渡会貞蔭 蘭田氏韶 益谷末壽 井面守訓 蘭田守諸 菊谷末偶 益谷末晴 板倉茂木 村田並木 一見直木 白子昌平 森祐秀 後藤宗凭 七里政要 倉田有成 酒井直章 倉田英林 川喜田政式 芝原房氏 七里玖能 世繼 大館民美岐 小浦朝通 笠因直丸 三井高蔭 中里常岳 本居春庭 須賀手纏 竹内直道 松坂の式通 林利長 三谷清通 村上有行 本居大平の三十六人である。姓名録によると小浦朝通と松坂の式通が同人であることから総数は三十五人となる。この三十五人が「山霞」「梅薫風」の兼題で詠んだ二首を（小浦朝通は計四首となる）、歌合の主催者がそれぞれに一番から三十六番に番へて書いたものであり、それに宣長が勝・持をつけ、判詞を書いたものである。このことは、ほか三種の歌合にも共通する。

三十五人を地域別に分類すると伊勢の神宮の内宮関係者が佐



三十六番歌合

張が大館民とその侍女美岐の二人、紀伊が小浦朝通（紀伊藩士で松坂在か）と太平の二人、松坂が笠因直丸 三井高蔭 中里常岳 本居春庭 須賀手繼 竹内直道 林利長 三谷清通の八人である（それぞれの人物の委細については註を参照）。

尾張と紀伊を除けばその多くが伊勢国に住む人物である。『全集』載録の宣長判の歌合の多くが伊勢の門人に集中してゐるが、この歌合もその中の一つと言ふことができる。伊勢の地に多いのはやはり宣長との地縁関係からくるものと思はれる。特にこの歌合には伊勢においては内宮、白子、一身田、津、松坂と宣長の地縁のある場所であり、それぞれの地で歌合に出詠した者以外をも含めた鈴屋門の社中が形成されてゐたことが伺へる。どの歌合にも言へることはあるが、少なくとも特定の兼題で歌を詠むことを薦め、それを纏めてかやうに番ひにして一冊に整へて宣長のもとに届けて判を依頼した人物がゐたこととなる。

地域的に人物を見てみると内宮では渡会貞蔭以外の八人中七人はみな宣長の門人である。その中では天明四年に入門した菊谷末偶が古参となる。古参とだけあつてこの四種の歌合にすべて出詠してゐる。（表一参照） ついで天明七年に入門した藪田氏韶、井面守訓、益谷末壽、梅谷末晴、またその翌年の八年には佐八定長と続いてゐる。また寛政元年には藪田守諸が入門してをり、後述するやうに天明末年から内宮の祠堂の宣長入門が増加してゐる。その上、守訓、守諸、末晴の三人はこの他にもここにある二種の歌合に出詠してゐるのである。殊に特筆すべきは益谷末壽で彼はこの四種の歌合に出詠してゐる出精ぶりである。末壽は内宮の古参である菊谷末偶の子であり、益谷家に

- 八定綱（定長） 渡会貞蔭 藪田氏韶 益谷末壽 井面守訓 藪田守諸 菊谷末偶 益谷末晴の八人、伊勢白子が板倉茂木 村田並木 一見直木 白子昌平の四人、伊勢一身田が森祐秀 後藤宗凭の二人、津が七里政要 倉田有成 酒井直章 倉田英林 川喜田政武 芝原房氏 七里玖能 侍女の世繼の八人、尾

養子に入つたもののこの親子の宣長に対する思ひはなほ篤いものがあつたと言へるし、宣長も末壽に対しては殊の外の思ひがあつたやうである。(後に宣長の『伊勢二宮さきたけの弁』をめぐり残念な結果となるが。)

表四は『全集』別巻二・三に翻刻された歌合から、この四種の歌合前後に行なはれた歌合で、この四種の歌合に見える歌人の出詠状況をまとめたものである。これによると現在伝存が確認されてゐる歌合でも、寛政二年には正月、二、四、八、九、十月と毎月のやうに歌合が行なはれてゐたやうでもある。これによれば末偶、末壽父子はこの前後の寛政二年四月の「二十四番歌合」と八月の「三十三番歌合」にも出詠してゐることがわかる。

白子の四人はみな宣長の門人である。中でも茂木、並木、直木の三人は天明四年の入門で、白子三木と称される宣長門人であつた。この村田並木が後の春門である。昌平は遅く天明八年の入門である。また表四を見れば、歌合四種の前後に行なはれた歌合での出詠状況を見ると並木は寛政二年度には殆ど出詠してゐることがわかり、本歌合への出詠もこの一連の歌合の続きでなされたものであると言へよう。

一身田の二人は天明四年の入門であり、末偶と同じくこの歌

合の出詠者の中では早い方である。また祐秀は寛政元年十月、寛政二年二月の歌合に出詠してゐる。

津の八人中では、七里政要、川喜田政式の二人が古く、天明七年の入門である。表四によれば、七里政要はこの前後の歌合には必ず出詠してゐる。妻の玖能は宣長の門人帳に名はないが、この表以前の寛政元年の「四十八番歌合」に出詠してゐるが、そのあととはなく、今回は久しぶりの出詠であつた。英林、政式、房氏(春房とも言ふ)の三人はほぼ多くに出詠してゐて、直章は寛政二年四月歌合以来毎回の出詠である。有成は寛政四年の入門であるからこの歌合の折にはまだ宣長の門下ではなかつた。それでもこの後の寛政三年の四月の「二十番歌合」にも出詠してゐるのである。宣長は歌合の出詠者をかならずしも門人と限つたわけではなかつたやうである。尤も歌合は作者は匿名であるから判詞を書くのにそのことは関係ないのであらう。門人を増やすためには当然このやうな門人ではない人物の指導も必要であつた。

松坂は八人で宣長の御膝元だけあつて全員が門人であり、また古参の者がゐる。中里常岳は安永二年以前の入門、三井高蔭が同八年である。高蔭と宣長との関係は古く、且つ深く、ここでは述べられぬほどのものがあつたが、寛政十一年の三月十六

日には三井高蔭の別業畑屋において鈴屋大人七十満齡の賀會が開かれたことだけを挙げておく。

表四からは常岳が古參だけあつてこの前後の歌合には毎回出詠してゐることが目を眩る。また嗣子春庭は当然のことながら、直道などはよく出詠してゐる。須賀手纏はこの歌合があつた寛政三年の入門であるが寛政二年の正月から三度の歌合に出詠してゐる。

このやうなことから、この寛政三年の春の「三十六番歌合」は特に改めて実施されたものではなく、伊勢の宣長門人達にとつては月毎のやうに行なはれてゐた歌合であり、その都度に判を宣長に乞ふことが行なはれてゐたのであらう。(尤もこの四種の歌合の判は同時ではなく別々に宣長に乞うたものと思はれる。)

## 二、「十六番歌合」

四種の歌合のうち年代の二番目のものがこの歌合で、寛政四年二月に行なはれてゐる。本書には三番目に綴ぢられてゐる。

兼題は「待花」「寄鳥恋」の二つである。出詠者は泉舎輝(二首)、益谷末晴(四首)、坂尚品(二首)、澤瀉常尚(四首)、桐邦壽(三首)、中川経先(四首)、岩井田尚友(四首)、菊谷末

偶(四首)、益谷末壽(二首)、の九人であり、いづれも神宮の内宮の祠官である。以下三種の歌合の出詠者がみな内宮の神職であることがこの書物の大きな特色となつてゐる。歌数を示したのは、名を欠く歌が四首あり、それを誰の作としても、この歌合は出詠の歌数が人によつて相違することがわかる。

宇治に住む者で宣長の門人に名を連ねた者は二十八名であり、全てが内宮の神職である。

この歌合の出詠者は九人であり、経先以外の七人が宣長の門人である。古參の者は菊谷末偶で天明四年に入門、これはこの四種の歌合に出詠してゐる十五人の神宮の祠官の中で早い方の入門であつた。先にも述べたが末偶と末壽の二人はこれ以前の歌合にも出てゐて、宣長との深い関係が伺はれる。表一や註などからわかる通り、他は天明七年の入門が五名と多く、邦壽が寛政三年に入門してゐる。梅谷末晴はこの歌合が行なはれた二月末の二十七日に七十二歳で逝いたので生前の出詠はこれが最後となつてしまつた。また、ここに名のある中川経先は宣長の門人帳に名は見えないものの『本居宣長事典』によると安永四年入門とある。但し、この入門のことは『全集』別巻三の年譜の同年記事にも見えない。しかし「金銀入帳」の寛政八年秋、翌年の春に一分を宣長のもとへ納めてゐるのは何かの謝礼であ



らうか。いづれにせよ宣長とは何らかの関係があつたことが伺へる。因みに経先は最初の名を「守先」と言ひ、天明期に経先と改名した。三十六番歌合でも見た通り、このやうに宣長は正式に入門をしてゐなくとも、歌合の出詠を拒まなかつたし、また門人外でも宣長の判を乞ふことはあつたやうで、積極的に宣長に関はらうとしてゐたことが伺はれる。

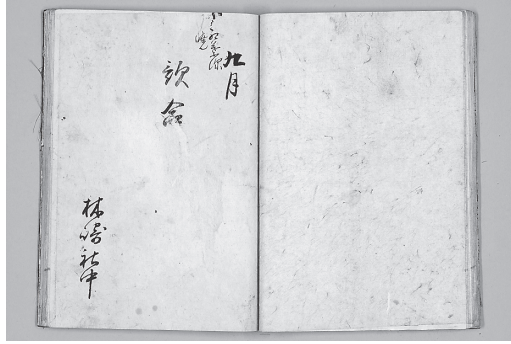
宣長の伊勢の神宮への参宮は宝暦七年十一月を初めに計九回に及ぶ。また早くに荒木田久老、蓬萊尚賢や中川経雅との交流を通してその学問を深めていつたのである。その結果宇治には二十八人、山田には十一人の門人を擁したのであつた。ここにある歌合の直近では天明八年三月、またその二年後の寛政二年九月に参宮してゐるのも、遷宮後の参宮の為ではあつても、またこれらの門人との交流をも目的としたものであつた。天明七年に内宮の祠官が多くの人門したのもそのやうな中での出来事であり、この歌合もその流れの産物であつた。中川経雅の『経雅卿雜記』（神宮文庫蔵）を見れば、一例としてこの後の寛政七年四月九日の参宮時には経雅も宣長に会ひ歌や講釈を聞いてゐることがわかり、また末偶宅に泊つたり、内宮の神職との交流がなほ盛んであつたことがうかがへる。

### 三、「十二番歌合」（実は十六番）

四種の歌合のうち年代の三番目のものが二番目に綴ぢられてゐるこの歌合で、寛政四年九月に行なはれてゐる。兼題は「紅葉深」「曉」である。出詠者は泉舎輝 井面守訓 澤瀉常尚 益谷末壽 桐邦壽 菊谷末偶 中川経先 蘭田守諸の八人で、これもいづれも神宮の内宮の祠官である。表題に十二番とあるが、後に経先と守諸の四番の歌合が追加されて十六番となつてゐる。

重要な事はこの歌合の表題に「林崎社中」と書かれてあることである。これによりこの当時これらの内宮祠官で組織された宣長門人の林崎における社中が組織されてゐたことが明らかとなるからである。ここには八名の名が挙がるが、先の「十六番歌合」から五ヶ月後のことであり、この間に宣長が判詞を書いた歌合は発見されてはゐないものの、或は林崎の社中では毎月このやうな歌合が開かれ、特に其の中から歌合を番へて宣長に判を乞うたこともあつてもをかしくはない。二月の歌合に続けての出詠は末偶末壽父子の他に泉舎輝 澤瀉常尚 桐邦壽 中川経先の四人である。

宣長と内宮の林崎との関係はこれ以前に遡る重要なものであつた。この歌合から十年前の天明二年に蓬萊尚賢によつて内宮



林崎社中の文字が見える

の林崎文庫が再興され、尚賢との関係で宣長が「林崎ふみくらの詞」を書いたのも同年のことであつた。後述するが門人か否かは関係なく、磯部昌綱や菊谷末偶との関係は安永の初年からあつたのである。その二年後の天明四年八月には村井古巖による蔵書の奉納があつて、文庫の充実が図られたのである。天

明六年七月からこの林崎文庫で月例歌会が始められ、末偶と養子に出た末壽父子の他、その翌年に宣長に入門することとなる内宮祠官が参加をしてゐる。末偶の『菊能歌集』（神宮文庫蔵）には、

こゝの（中澤註 林崎）社中も此会（同註 松坂の宣長の歌会）の兼題よみいでしてむやと 本居のうしのさとされ

ければ天明の七年の比よりをりをりよみてつかはしけるとある。これによれば林崎の歌会は宣長の薦めにより、松坂の歌会に倣つて天明七年からはその兼題を用ゐて行はれたことがわかる。天明七年とはそのやうな年であり、これが内宮祠官の入門の契機となつたのである。宣長は送られて来たその歌会の綴りに丁寧な目を通したのである。丁度其の頃の、天明七年四月十日付けの宣長の末偶宛書簡は、

御社中御詠草添削返上申候 扱々多用ニ而致延引候  
とあり、また某年二月五日付けの宣長の末偶宛書簡には、

扱々不得寸暇御詠草も甚延引いたし 御社中へ返書も漸此  
度さし遣申候

とあり、同様に某年九月十四日付けの宣長の末偶宛書簡には「御社中歌会も不絶有之哉」とある。これらの末偶宛の書簡に見える「御社中」は言ふまでもなく林崎社中のことである。「暇がなく詠草を見る事が延び延びになつたが、社中詠草を添削したので送る。漸く社中に向けての返事も書けるやうになつた。」といふ内容である。多忙の時間を割いてもこのやうに門人に対してゐた宣長の姿がわかるものである。前者は天明七年とあるのでまさにその年であり、後者は年紀が不明なものこれらの書簡から林崎社中が運営され、その社中の中心的な存在

が末偶であつたこと、宣長が林崎の社中へ氣遣ひをしてゐることなどが判るのである。寛政二年九月朔日付け末偶宛書簡には文庫の御会にこちらから参加すると言ひつつ延引を託び、またその年の十二月八日付けの同人宛書簡には「御いそぎの御詠草致添削返上申候、中川氏之詠草も返進申候」と詠草の添削返信につけて、中川経雅の詠草も送る旨を告げてゐる。天明八年の三月の宣長の参宮の時は、末偶の許に宿泊してゐるのであり、寛政二年の遷宮後の九月六日の参宮についても同じであつた。ついで翌九月七日の林崎文庫での社中の遷宮奉祝歌会に出席してゐるのである。

#### 四、「二十八番歌合」

四種の歌集の年代の最後の歌合であり、寛政六年正月に行なはれてゐる。兼題は「梅薫袖」「春恋」の二つである。出詠者は益谷末壽 益谷末晴 蘭田守諸 泉舎輝 菊谷末偶 坂尚品 桐邦壽 井面守訓 澤瀉常尚 中川経先 佐八定長 岩井田尚友 守屋昌綱 古人の十四人である。この古人は固有名詞であらうか、誰をさすかは判然としない。それで勅撰集の古歌をここに宛てたものと推測して『国歌大観』勅撰集の部の索引をあつたが、この二首の歌を見出すことはできなかつた。または

身近な人物でありながら「詠み人知らず」として故意に名を隠したのかも知れない。〔全集〕に翻刻されてゐる歌合の幾つかに「古人」としたものがあつた。宣長の手許に送られた時に、古人と名を明かしてあつたかは不明である。(虫損の箇所があつて作者が判然としないものもあるが)宣長は古人の歌に「勝」は付けてゐない。

他の十三人は全て内宮の祠官であり、先の「十六番歌合」「十二番歌合」に出詠してゐる者を表一から相互に完補すると総勢十三人となり、内宮関係の二、三、四の三種の歌合の中で此の歌合には全員が出詠してゐることとなる。(寛政三年春歌合)の渡会貞蔭 蘭田氏韶の二人を入れると十五人となる。)宣長の門人である内宮の神職は総数二十八名で、そのうち古くから関係が深い蓬萊尚賢、天明八年入門の十文字典膳、寛政五年入門の中瀬以勝が見えない位で、あとは大方ここに名が残つてゐる(この歌合以後、寛政七年には大國盛業、烏帽子末方が入門、その後も何人かの入門が続く。)

特にこの出詠者十三人中、守屋昌綱の出詠があることである。昌綱は内宮神職と宣長との契機を作つた人物で、末偶がその縁を結んだのである。この兩人は謂はば林崎社中の生みの親と言へる。入門は天明七年ではあるが、また安永六年の入門と

も言ふ。この関係は昌綱の『神都考僻説弁』を末偶が宣長に紹介したことに始まる。共にまだ宣長の門人とはなつてゐない時期ではあつたが、宣長はこれに対し「磯部主へ送ル総論」を書いて、丁重に自分の考へを述べたのであつた。また益谷末晴は先にも見たやうに寛政二年の二月に逝いてゐるので、ここには過去の歌から転載したのであらうか疑問が残らなくもない。岩井田尚友はこの年の三月二十一日に六十七歳で歿するので、最晩年の作となる。いづれにせよ、この頃が内宮における宣長門人、林崎社中の最盛期であつたと言へよう。『本居宣長と鈴屋社中』において中村一基が林崎（宇治）社中について「このような宇治社中は宣長生存中結束した社中となり得なかつた」とし、その原因に宣長との神道の教学上の隔たりの問題があつたと指摘してゐるが、教学問題は姑く置くとしても、この当時は斯様に歌学びを通じては一つの社中を形成してゐたと言へるであらう。末壽が『内宮外宮之弁』を書くのはこの寛政六年のことであつた。

これらの四種の歌合を概観して思はれることは、先述したが社中の中心的な人物の存在である。林崎は当然として、「寛政二年春歌合」にあつた、それぞれの地域の社中に兼題を呼びか

け、出された歌をまとめたのであるが、この四種の歌合せの出詠者を考へるとそれは内宮の門人祠官であつたと考へられる。中でも宣長に一番近い関係にあつた祠官は菊谷末偶であつたと思はれる。宣長と末偶、末壽との関係は中西正幸の『伊勢の宮人』に詳しく、委細はそれを参照して頂きたい。

その関係の一つとして、井面守訓が書いた「末偶家集序文」の草稿（宣長添削）が『全集』別巻二に載るが、そこには、

鳴る神の音高き鈴屋の大人にものまなびして、ふじのしばやまのしばしばにこととひかよはし・・・中略・・・まなびの道はみなかの大人におもむけまつろはせて、ただ其の人々をみやびの友とむつびつ・・・

とあることが、その親密な関係を明らかにしてゐるのである。天明八年の宣長參宮の折、また寛政二年の遷宮の時に末偶宅をその宿にしたことは先に触れた。同七年の四月に參宮した折にも末偶宅に宿泊してゐるのである。師を自宅にお泊めすることとは榮譽なことでもあつたはずであり、宣長も亦気安かつたことであらう。この寛政二年には横井千秋を通して内宮の文殿に自著『古事記傳』初帙五巻と『神代正語』を奉納してゐるのであり、自ら參宮もして、林崎文庫での遷宮奉祝歌会に出たことは先にも述べた。また十月十五日には内宮文殿の歌会が再興さ

れるなど林崎社中の歌学びは更に盛んになつていつたのである。文殿の歌会の肝入りはこの歌合にも名がある菌田守緒であつた。ついで十一月に宣長は光格天皇の寛政内裏への御遷幸を拜しに上京したが、この時に春庭、大平、林杏介の他に末偶、末壽を同伴してゐるのである。

他にも宣長は何度も末偶の歌を添削してゐて、末偶宛の宣長書簡の幾つかからでもそのことは伺へる。例へば寛政五年五月二十二日付けの宣長の末偶宛書簡には「御詠草返巻申候」とあり、年不明の十二月十六日付けの宣長の末偶宛書簡には、

御詠草被遣致添削返進申候

とある。寛政六年十月三日付けの末偶宛書簡にも「右故御詠草も返巻致延引候」と詠草を多忙の時間を裂いて、期日を延引しながらも添削したことが伺へるのである。先に林崎社中宛に出された書簡の事にも触れたが、宣長は五歳年下の末偶（及び子の末壽）にそれなりの期待を抱いてゐたのである。それは内宮に於いて鈴屋の古学が広まることにつながるからであつた。寛政六年五月の中川経雅宛書簡には「遷宮物語序文承知」とあり、末偶の『寛政遷宮物語』に序文を寄せることを承知し、次いで序文を寄せてゐるし、中川雅経の『大神宮儀式解』には宣長の序文と、末偶の跋文があると言ふ関係である。寛政五年十

一月九日付けの出雲の千家俊信に宛てた宣長の書簡には格別出精厚志の人物として末偶を挙げてゐるのである。かやうなことからも末偶は宣長門人として、その中心的な役を担つてゐたと言へるであらう。

四種の歌合に出詠した歌はなるほど宣長が「聞こえがたし」「いかゞ」と評したやうに、歌としていかかと思はれるものも多いが、門人は努めて歌を詠んだことと思はれる。当時は詠歌の手引きとなる書物として、例へば『歌枕秋の寢覚』を初めとして『和歌分類』『和歌八重垣』などの有賀長伯の一連の歌学入門書がいくつか刊行されてゐてどの歌も、兼題に対して常套的な表現をしてゐるのもこのやうな書物を参観したからなのであらう。

例を挙げれば「山霞」の題に対しては、歌枕として「みよしの山」「浅間山」「富士の山（嶺）」「春日山」などが詠まれ、また「さほ姫がかすみの袖（霞の衣）」「かすむのどけさ」「山の端」などが多く詠まれてゐる。同様に「梅薫風」とあれば「春風」や「袖」が、「紅葉深」とあれば「時雨」「染める」、「暁」には「暁の鐘」「鳥の音」「夢」などが詠まれてゐて、そのためどれも同じ調べの歌となつてしまつてゐる。そのやう

な中でもそれなりの歌趣のある歌もある。

宣直は若き日の著述である『排蘆小船』において既に歌は「いう（優）に」詠むべきであるとの考へを持つてゐて、また三代集に精通すれば新古今の調べも身につくと主張してゐる。その考へはここでも散見し、「梅の香を盗む」と詠んだことに對し、「ぬすむも又いうならず」と言ひ、霞の衣が山すそかけてこむると詠んだ大館民の歌に對し「こむるいうならず 又すそ野をかけてといひて山端と留りたるもいかゞ」と評して、優に詠むことを訴へてゐる。また言葉の用法についても「待ちわびる」に對して「わぶるをわびるといふは俗言なり」、また「此いなやは俗言になる也」などと俗言を嫌ひ、批判をしてゐる。

村上成行はのちに撰津に出て名をなす村上潔夫のことであるが、この作者の、

立よれば春やむかしの涙さへこぼれて袖にほふ春（夕）

風

について「新古今の風情 涙さへこぼれて袖に匂ふいとおもしろし されど落題なればいかげせん 春も二つ有 涙さへこぼれて匂ふ梅花春やむかしの袖の夕風とも有べし」と新古今の調べの歌であるとしつつも、業平の歌の本歌取りでありながら

「梅」が詠まれてゐないこと、春が二つ詠まれてゐることなどを指摘し、全体を詠み替へてゐるのである。寛政初年は潔夫は二十歳台前半であつた。このやうな詠み改めは他にもあつて、岩井田尚友の、

隔てなき心としら（なりせ）ば春かすみ空（千重）にたつとも名をや（は）をしまむ

の歌は見え消ちで自ら直したのち、判には「直しのごとくあらまほし」と書き付けてゐる。

また政式の、

春風は梅の木の間を過ぬらむにほひになびく青柳の糸について、「このまいかゞ 糸無用 青柳のなびくもにほふ春風は梅のたち枝や過てきぬらんなどあらまほし」と改作を示して指摘してゐる。

用語に関しては細かな指導をしてをり、「霞をそへていかゞ霞をそひてどこそいふべけれ」「風二ツあるはいかゞ」、「あかぬをあかれぬといふことなし」などと評し、更に、佐八定長の、

かをり来て袖にうつりしうれしさをつ、むに餘る梅の追風については「うつりしはうつれるならではわろし 此けぢめをよく思ふべきこと也 今の人は多く此わきまへをしらず」と

「うつりし」(過去)と「うつれる」(存続)の相違を指摘し、末偶が「香をとめて」を袖に香を留めたと解釈して詠んだ歌に對し「香をとめてはこれは香をしるべに尋きたる意なれば袖に香をとめたるとは別也 故に袖に香のとまりたる意いひしらず」と香を尋ねての意であるとの注意を示してゐる。

興趣をそそる指摘としては、

梅がかを袖にうつして朝戸出のさむさわする、庭の春風の末偶の歌に對して、「四の句火をたきてあたりたるやう也」と評してゐる。なるほど寒さを忘れるほどの庭の春風は朝の門出には極端すぎる表現である。藺田守諸の

うち霞む春のよすがらてる月のおぼろげにのみ物思ふもうし

には「かすむといひて照月はいかゞ 下句聞えがたし」と語句的の確な使用を促してゐる。なるほど霞む空に照る月は不自然であり、下の句のおぼろげにの序詞とはなり難い。

また虫損の為、作者が未詳である、

つゝめどもあだの大野の春霞うき名と共にたつがくるしきの歌には「あだの大野いかゞ あだといふこと此哥にはわろし四の句いかゞ 霞と共にうき名のたつとこそいふべけれ うき名と共に霞のたつといひては霞のたつがくるしきやう也」とあ

る。霞の縁語は「立つ」であるが、霞とともにうきな(浮名・憂き名)が立つのかうきなとともに霞が立つのとは大きな違ひがあると指摘するのである。

歌の題意に添はない表現についても手厳しく指摘してをり、例へば泉舎輝の、

思はずも袖の香ふかくなりけり梅の木陰に春日くらの歌について、「結句桜のさま也 梅には少し似つかはしからず」と「木陰に春日くら」すことが、題の「梅」に似つかはしくない指摘し、また倉田英林の、

はてはうき物としらでや梅の花にほひを風にまかせそむらん

については、「上句さくらの風情にちかし 結句そめけむなるべし」とここでも梅の歌であるべきものが「桜」の風情になつてゐることを指摘して挙げてゐる。梅の歌を詠んだつもりが桜の歌になつてゐるとの指摘はなるほど鋭い感覚であらう。また澤瀉常尚の歌にある

つれもなき人の心の春霞隔てはてぬる契かなしも

についても「春霞といふことをのぞきても同じこと 又何にかへても同じことなれば題意はたらかず」と本来歌の中心にあるべき春霞の語がなんら働きを示さぬことを指摘し、同様に梅谷

末晴の歌、

妻をこふ（こふる）野邊のきゞすもよそならで（ず）同じ

思ひに音をのみぞなく

もまた「きゞすをを鹿にかへても同じこと也 されば必きゞす

すによれる詞を添ざれば其物うとく也」と、雉を詠むのならそ

れに関する語を用ひなければ雉が生きてこないと鋭く指摘する

のであつた。

以上見てきたやうに宣長の評は短いながらも端的によく歌の

是非を指摘してゐて、それぞれの評の意味するところが深い。

このやうに門人に対する細かな心遣ひや指摘は歌合の評によく

表れるものであり、その意味でのこの四種の歌合は貴重である

と言へる。

表一 出詠者一覧

（凡例）番号は解題に従ひ、一は寛政三年春「三十六番歌合」、二は寛政四年二月「十六番歌合」、三は寛政四年九月「十二番歌合」、四は寛政六年正月「二十八番歌合」を表す。（以下、表の番号はこれに同じ）

出詠者	一	二	三	四	宣長入門	備考
佐八定長	○			○	天明八年	内宮神職
渡会貞蔭	○					内宮神職
藺田氏韶	○					内宮神職
益谷末壽	○	○	○	○	天明七年	内宮神職
井面守訓	○		○	○	天明七年	内宮神職
藺田守諸	○	○	○	○	寛政元年	内宮神職
菊谷末偶	○			○	天明四年	内宮神職
梅谷末晴	○			○	天明七年	内宮神職
坂倉茂木	○				天明四年	内宮神職
村田並木	○				天明四年	白子

藺田姓







表三 『全集』に翻刻された前後の歌合による本歌合の位置

	年次	名称	別巻
イ	寛政元年十月	三十六番歌合	②
ロ	寛政元年十二月	二十七番歌合	③
ハ	寛政二年正月	十八番歌合	②
ニ	寛政二年二月	十八番歌合	②
ホ	寛政二年四月	二十四番歌合	②
ヘ	寛政二年八月	三十三番歌合	②
ト	寛政二年九月	三十番歌合	②
チ	寛政二年十月	二十一番歌合	③
一	寛政三年 春	三十六番哥合	
リ	寛政三年四月	二十番歌合	②
ヌ	寛政三年九月	十二番歌合	③
二	寛政四年二月	十六番哥合	
三	寛政四年九月	哥合	
ル	寛政五年八月	六十番歌合	③
四	寛政六年正月	廿八番哥合	
ヲ	寛政六年三月	百二番歌合	②
ワ	寛政七年正月	十八番歌合	③

新出資料	本居宣長	直筆判詞	歌合四種	について
益谷末壽				イ
菊谷末偶				ロ
坂倉茂木				ハ
村田並木				ニ
一見直木				ホ
白子昌平				ヘ
森 祐秀				ト
後藤宗凭				チ
七里政要				一
倉田有成				リ
酒井直章				ヌ
倉田英林				四
川喜田政式				ヲ
芝原房氏				ヅ
七里政能				ヅ

表四 四種の「歌合」前後の「歌合」の出詠者関係

二と三は同年の春と秋のものであるため、二のみを掲げた。



林崎文庫月例歌会に出る。

益谷末壽 天明七年入門 内宮権禰宜(菊谷末偶の男 風日祈宮内人益谷末村の養子) 文化十一年歿 六十五歳 著作に『内宮外宮之弁』、宣長の著を批判した『伊勢二宮割竹弁難』などがある。

井面守訓 天明七年入門 内宮神職 家集に『東家歌抄・磯の藻屑』、著書に『大祓詞新考』などがある。二見に末壽らと遊ぶ紀行「月の出しお」は宣長の添削、また末偶の歌集『菊能歌集』の序文を寛政九年に宣長が添削。(共に全集別二)

梅谷末晴 天明七年入門 内宮神職 荒木田氏 寛政四年歿 七十二歳  
天明六年七月の再興林崎文庫月例歌会に出る。

泉 舍輝 天明七年入門 内宮権禰宜 荒木田氏 本多忠順の男、泉舍諸の養子 天保五年歿 八十歳

澤瀉常尚 天明七年入門 内宮権禰宜 享和三年歿 七十二歳 天明六年七月の再興林崎文庫月例歌会に出る。

坂 尚品 天明七年入門 内宮権禰宜荒木田氏 文政十三年歿 七十九歳

岩井田尚友 天明七年入門 内宮権禰宜荒木田氏 寛政六年歿 六十七歳  
著作に『神路記』『神論記』などがある。男に尚徳がある。

守屋昌綱(磯部) 天明七年入門(安永六年の説『本居宣長事典』あり) 内宮風日祈宮内人 文化十二年歿 六十九歳 宣長一磯部主へ送る(総論)あり。

佐八定長 天明八年入門 内宮権禰宜 荒木田氏 藤波氏式の二男、佐八定綱の養子 文化元年歿

藪田守諾 寛政元年入門三十二歳 内宮権禰宜 荒木田氏 藪田守香の男、守淳の養子 文化九年歿 五十五歳 『鈴屋翁七十賀会集』に子の守良、守彝とともに出詠

桐 邦壽 寛政三年入門 内宮師職 文政九年歿 五十三歳

渡会貞蔭 内宮神職 藪田姓 生歿等不詳

○白子(四人)

坂倉茂木(茂樹) 天明四年入門 白子三木の一人(以下三人) 鈴鹿白子栗真神社神職 寛政十一年歿 三十七歳

村田並木(春村) 天明四年入門 村田橋彦の養子 このあと江戸、大坂に出る。天保七年歿 七十二歳 寛政元年三月十九日名古屋帰り 宣長が泊 同年八月四十八番歌会に出詠

一見直木 天明四年入門 白子の鍼灸師 文化五年歿 四十三歳 寛政元年二月二十九日名古屋帰りの宣長が泊まる 琴の屋と言ふ。

白子昌平 天明八年入門 白子の木綿問屋 寛政六年七月歿

○一身田(二人)  
森 祐秀 天明四年入門 津一身田寺侍 寛政二年の歌会に出る  
後藤宗凭(照広) 天明四年入門 津一身田寺侍

○津(八人)  
七里政要(松叟) 天明七年入門 出精厚志の人物 津藩士 文政三年歿 七十七歳

川喜田政式(夏蔭) 天明七年入門 津の商家 文化十三年歿 五十三歳  
寛政五年光徳寺歌会に出る。

酒井直章 天明八年入門 津 医師 寛政二年松坂の歌会  
倉田英林(秋満) 寛政元年入門 津餅菓子屋 文政七年歿 七十二歳 享和元年(四月十四日)の上京に従ふ。

芝原房氏(春房) 寛政二年入門 津の米穀商 文化五年歿 三十九歳 寛政五年光徳寺歌会に出る。

倉田有成 寛政四年入門 津八王子社神官 寛政五年四月二十八日宣長の名古屋帰りの光徳寺歌会に出る 寛政七年歿 六十一歳

七里政能 津 七里政要妻

世繼 津 七里家侍女

○尾張(二人)

大館 民 寛政元年入門 尾張海東郡木田村豪農 大館高門の兄大館佐右

衛門信庸の妻

文化四年歿 四十七歳 「名古屋日記」

美岐 尾張 大館家侍女

○松坂・紀(十一人)

中里常岳 安永二年以前の古参門人 中里五兄弟の二男 松坂住 文化十

年歿 五十四歳三井高蔭 安永八年入門 松坂三井鳥居坂家四

代 天保十年歿 八十一歳

竹内直道 天明四年入門 松坂商家津島屋七代 天明四年歿 父の元之も

宣長門 著作に『道しばの記』『峰の松風』など

村上有行 (潔夫・円方) 天明五年入門 文化六年伊丹に移住 文政六年歿

五十五歳

笠因直丸 (直麿) 天明七年入門 松坂殿町雨籠神社祠官 嘉永六年没 八

十二歳

小浦朝通 (式通) 寛政二年入門 紀藩士 紀州の古参

須賀手纏 寛政三年入門 寛政四年二月歿

林 利長 寛政三年入門 松坂の筆屋 菅笠日記など版下を書く 宣長贋

作名人として破門された。

三谷景介 (清通・比曾牟) 寛政三年入門

本居春庭 宣長の男 文政十一年歿 六十五歳

本居大平 宣長の養子 明和五年入門 紀州に移住 天保四年歿 七十八

歳

本稿なるに当たりお茶の水女子大学の浅田徹先生には情報のご提供などご指導を頂いた。また國學院大學図書館の古山悟由氏には閲覧をはじめ種々のご協力を賜った。ここに記して厚くお礼を申し上げます。